オツベルと象

宮沢賢治

……ある牛飼いが物語る。

　　　第一日曜

　オツベルときたらたいしたもんだ。こき機械の六台もえつけて、のんのんのんのんのんのんと、おおそろしない音をたててやっている。

　十六人のどもが、顔をまるっきり真っ赤にして足でんで機械を回し、小山のように積まれたをかたっぱしからこいていく。わらはどんどん後ろの方へ投げられて、また新しい山になる。そこらは、もみやわらから立った細かなちりで、変にぼうっと黄色になり、まるでののようだ。

　そのい仕事場を、オツベルは、大きなのパイプをくわえ、きをわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

－24－

　小屋はずいぶんで、学校ぐらいもあるのだが、なにせこき機械が、六台もそろって回ってるから、のんのんのんのんふるうのだ。中に入るとそのために、すっかり腹がすくほどだ。そして実際オツベルは、そいつで上手に腹を減らし、昼飯時には、六寸ぐらいのビフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べるのだ。

　とにかく、そうして、のんのんのんのんやっていた。

　そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやってきた。白い象だぜ、ペンキをったのでないぜ。どういうわけで来たかって？　そいつは象のことだから、たぶんぶらっと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。